

応用哲学会 第6回年次研究大会
ワークショップ〈音楽作品の存在論にもの申す〉

それは 音楽作品の存在論なのか？

松永 伸司
東京芸術大学
matsunagashinji@gmail.com

2014.05.10

疑問は2つ

- ① その話、音楽作品じゃなくてもいいのでは！
- ② もっと音楽ジャンルごとのちがいに気を配るべきでは！

疑問①

音楽作品じゃなくても
いいのでは！

音楽作品の存在論の論点

タイプ説、唯名論、創造説といった立場は、
たとえば以下の論点で対立する。

- 音楽作品の創造可能性(creatability)
- 音楽作品の聴取可能性(audibility)

創造可能性のパズル

- a. 音楽作品は作れる。
 - b. 音楽作品は抽象的対象である。
 - c. 抽象的対象は作れない。
-
- 複数事例を持つ人工物一般の話！
 - 音楽作品に限定する理由がわからん！

聴取可能性のパズル

- a. **音楽作品は聴ける。**
 - b. **音楽作品は抽象的対象である。**
 - c. **抽象的対象は聴けない。**
-
- **反復可能かつ知覚可能なもの（出来事）一般の話！**
 - **音楽作品に限定する理由がわからん！**

**→ 音楽作品に限定する
理由はあるのか？**

想定される応答

- 「トピックは一般的なものだが、音楽作品を例にする積極的な理由がある。」
- 「基礎的な(fundamental)存在論は、より高階の(higher-order)音楽存在論にとって必須。」
- 「音楽作品ならではの話をしています。」

疑問②

音楽作品ならではの話なら
ジャンルごとのちがいに
気を配るべきでは！

人工物としての音楽作品

音楽作品は人工物に属する。

人工物一般の存在論的特徴：

作者／使用者／共同体の「**志向的作用**に存在依存」する(倉田 2014)。

→ どのような**機能**を持つよう**意図**されているかが、その存在に決定的にかかわる。

音楽作品の意図された機能

音楽作品の（より一般的には芸術作品の）意図された機能とはなにか。

もっともな答え：

鑑賞ないし**批評**の焦点としての機能

→ 芸術の存在論は、鑑賞・批評の実践に合致しなければならない(Davies 2004)。

しかし

**鑑賞・批評の焦点となるべき音楽的事物
(musical things)は、ジャンル間でけっこうちがう。**

**そもそも「音楽作品」という概念がなじまない
文脈も多い。**

ロック、ジャズ、クラブ音楽、ガムラン、etc.

結果として

音楽存在論の議論は、ジャンルや文脈ごとに異なる性格を持つことになる。

- Gracyk (1996): 「ロックにおける作品は曲ではなく録音物！」
- Kania (2011): 「ジャズには作品なし！演奏だけ！」
- ポピュラー音楽における「カバー」「リミックス」「リマスタリング」といった概念を存在論的にどう説明するか(今井 2011; 増田 2013)。

→ **音楽作品ならではの話であるなら、「音楽作品」を含めた音楽的事物の概念がジャンルごとにちがうということにセンシティブであるべき。**

「音楽作品の存在論」はそのような気配りをしているのか？

タイプ説か唯名論か

ジャンルや文脈ごとに両者それぞれのメリットやモチベーションは変わってくるだろう。

たとえば、ジャズの存在論においてタイプ説を取るモチベーションはあまりないように思える。

一方、音構造タイプとしての作品を認めない唯名論者も、録音物の再生によって例化されるタイプとしての作品は認めるかもしれない。

まとめ

疑問①

音楽作品に限定する理由はあるのか？

疑問②

音楽作品ならではの話であるなら、
ジャンルごとの鑑賞・批評の焦点のちがいに
気を配っているのか？

References

- Brown, L. B. 2011. “Do Higher-Order Music Ontologies Rest on a Mistake?” *British Journal of Aesthetics* 51(2): 169-184.
- Davies, D. 2004. *Art as Performance*. Malden, MA: Blackwell.
- Gracyk, T. 1996. *Rhythm and Noise: An Aesthetics of Rock*. Durham, NC: Duke University Press.
- 今井晋. 2011. 「ポピュラー音楽の存在論:《トラック》、《楽曲》、《演奏》」『ポピュラー音楽研究』15: 23-42.
- Kania, A. 2008a. “New Waves in Music Ontology.” In *New Waves in Aesthetics*, edited by K. Stock & K. Thomson-Jones, 20-40. Basingstoke: Palgrave MacMillan.
- Kania, A. 2008b. “The Methodology of Musical Ontology: Descriptivism and Its Implications.” *British Journal of Aesthetics* 48(4): 426-444.
- Kania, A. 2011. “All Play and No Work: An Ontology of Jazz.” *Journal of Aesthetics and Art Criticism* 69(4): 391-403.
- Kania, A. 2012. “In Defence of Higher-Order Musical Ontology: A Reply to Lee B. Brown.” *British Journal of Aesthetics* 52(1): 97-102.
- 倉田剛. 2014. 「人工物の存在論」『ワードマップ現代形而上学』所収. 新曜社.
- 増田聡. 2013. 「われわれは『存在しないもの』を聴いている: 今井晋『ポピュラー音楽の存在論:《トラック》、《楽曲》、《演奏》』への応答」『ポピュラー音楽研究』17: 31-48.
- ステッカー, R. 2013. 『分析美学入門』森功次訳, 勁草書房.
- 田邊健太郎. 2012. 「ジュリアン・ドッドの音楽作品の存在論を再検討する: 聴取可能性の問題を中心に」『Core Ethics』8: 267-268.